源氏物語論

―夕霧造型―（三）

目加田さくを

○北方への対応――はしたなめ・諭す態度

(1)雲居雁に文を奪われると、「なほ〳〵しの御さまや、年月にそへていたうあなづり給ふこそうれたけれ。思はむところを恥ぢ給はぬよ」とたしなめる。(a)粗野な下人階層のような御振舞、(b)夫を軽蔑している、(c)夫の思わくを考えて恥かしいとも思われぬのか。

(2)相当の身分の夫が、北方一人を守って、おどおどしているのは世間の物笑の種である。多勢の妻妾の中で、北方として格別に遇されるのがよろしい。

と述べたて、

(3)緑の袖の名残で、よからぬ告げ口をする乳母共がおろう。

と、雲居雁方には、禁句の緑の袖――（もののはじめの六位宿世よ）・乳母のかつての失言――をぶっつけて、とどめを刺す。

筒井筒の仲で、遠慮のない妻は、貴婦人のプライドもかなぐりすてて

「おいらかに死に給ひね。まろも死なむ。見れば憎し、聞けば愛敬なし、見捨てて死なむはうしろめたし」

と、女心の生地まるだしにぶっつけても、さらりとかわして、巧みにお説教。ハッとわがはしたなさに気付く単純な妻は、夕霧の巧みな擬態に、まんまとひっかかって、すっかり疑念を晴らす。女三宮が柏木の文を茵の下にかくしておいて、「忘れにけり」――という「いはけなさ」であったのに似て、雲居雁も、「おましの奥のすこしあがりたる所をこころみに引きあげ給へれば、これにさしはさみ給へるなりけり」と夕霧に奪いかえされるのは、「とりし文のことも思ひいで給はず」、夕霧が「もとめむとも思ひ給へらぬ」風を装っているのを、「げに懸想なき文なりけり」ととって、気にもかけず、多勢の子供らの相手で、つい忘れていた為であった。夕霧のうはついた態度から、異変を感じながら、「(e)あるや恋しき亡きや恋しき」という鈍感さ、「にげなの亡きがよそへや」と夕霧に「ほゝゑみて」ごまかされるしまつである。少女巻十二才の少年は、二十九才の今日では堂々たる少壮官僚に成長し、十四才の少女は、三十一才の今日も全く成長していなかったのである。

二條院の東院で刻苦勉励した彼は、史記を四、五か月でこなした。

十二才擬文章生、十三才進士・侍従と、異例の速さで栄達への道を走る中に、少年の魂胆は鍛われてきたのである。内大臣の二條邸に引きとられた雲居雁は、しかとした貴婦人教育もうけていなかったらしい。このざまでは、夕霧に軽くあしらわれる外ない。それは、そのような娘に放置した父内大臣の責任を問う気にもなろう。舅まで軽蔑せざるをえなくなる。同じ内大臣の外腹の姫でも父六條院が育てた玉髪は貴婦人の本と評された。紫上にいたっては、月と何とかであろう。(d)の言、(e)の歌は、夕霧には、噴飯ものであり、呆れるよりも、可愛らしいと思わずにいられぬ雲居雁のていたらくである。

雲居雁が二條の致仕太政大臣邸に戻ってしまうと、早速訪れるが、(X)

(4)「かかる人どもをここかしこに落しおき給ひて、なんどの寝殿の御まじらひや、ふさはしからぬ御心の筋とは年頃見知りたれど……はかなき一ふしに、かうはもてなし給ふべきにやは」といみじうあはめ恨み給ふ

三條へ帰ろうとして、雲居雁に

「人の見聞かむも若々しきを。限りと宣ひ果てばさて試みむ。かしこなる人〳〵もらうたげに聞ゆめりしを。えりのこし給へる、やうあらむとは見ながら、思ひすてがたきを。ともかくももてなし侍りなむ」とおどし聞え給へば、すが〳〵しき御心にて、この君達をさへや、しらぬところにゐて渡し給はんと危し。姫君を、「いざ給へかし……母君の御教へになかなひ給ひそ。いと心憂く思ひとる方なき心あるは、いと悪しきわざなり」といひ知らせ給ふ。妻を嚇したり、けなしたり、娘に迄、母を見倣うな、と言う始末である、実家に戻ってしまった妻に対して、いささかも詫びぬ。かえって、人の子の母たる身が何だ！と責める。「離縁なさるお考えなら、そうしてみよう、私の手許に残された子供らが母を恋しがっているが、しかたがない。何とか私がしまつをつけよう」と、おどす。「多勢の子の母親らしからぬ大人気ない人だ」、と、全く雲居雁は小馬鹿にされる。それもやむをえぬ、と読者も思うところである。

○舅致仕太政大臣への対応

「このおとどもはた、大人大人しうのどめたるところさすがになし。いとひききりに花やい給へる人々にて、めざまし見じ聞かじなど、にが〳〵しき事どもしいでたまうつべき」(Y)

河・別　河・別

舅は大人らしい思慮分別がない、直情径行、派手なやり方をやる。気に入らぬと、とんでもない事をしでかしかねない人物、と夕霧は判断して、二條殿に雲居雁を訪う。

妻は又、里帰りの姉弘徽殿女御のお相手をして、寝殿で遊んでいるという。慕い泣く子を放ったらかして、いい気なものだ、と夕霧は(X)とたしなめる。それを見過している舅致仕太政大臣に対しても、少年の日、二人の仲を引き裂いて、「姉女御のつれ〴〵の御相手に」と、大宮邸から二條殿に引きとったやり口を思い出し、「又か！」と夕霧は呆れ、軽蔑の念を禁じえぬ。案の定、致仕大臣は、娘を、一応たしなめたが、「よしかくいひそめつとならば何かはおれてふとしも帰り給ふ、おのづから人の気色心ばへは見えなむ」と自邸にとどめておき、他に術もあろうに、最低の方法、嫁の女二宮に抗議の使を出した。その歌。

契あれや君に心をとどめおきて哀と思ひ恨めしと聞く

これでは、権力者のかさにかかった弱者いじめに外ならぬ。女二宮に罪はない。実はまだ靡いてもいないし、至極、迷惑がっていた、夕霧が勝手に迷うている現状である。実情も探らず、身勝手な抗議をする。かの若き日、北方の四君が、側室夕顔を脅迫したのと同じ手口である。そのやり口を嘆いた若き頭中将も、壮年に及ぶと、このような人間になってしまっている。夕霧が(Y)と推定したとおりを実行している。つまり、夕霧は、伯父、舅致仕太政大臣を、冷やかに眼下に見て、優位にかまえ、平然としている。少年の日の恋と今や壮年の恋では、立場逆転である。片や、致仕太政大臣、此方は大納言右大将、まもなく右大臣となる夕霧である。

○源氏と夕霧

源氏は夕霧の噂をきき、それとなく探りを入れる。「かの御子(女二宮)こそはここにものし給ふ入道の宮よりさしつぎにはらうたうし給ひけれ。人ざまもよくおはすべし」に対し、「御子はいかが物し給ふらむ、御息所は事もなかりし人のけはひ心ばせになむ。親しう打解け給はざりしかど、はかなきついでに人の用意はあらはなるものになむ侍る」と答えて、知らん顔をしている。源氏は、「かばかりのすくよけ心に思ひそめてむ事、諫めむにかなはじ、用ひざらむものから、(Z)われさかしに言ひ出でむもあいなし」と思って、何も言わぬ。つまり、夕霧の気性を知っている父は、言っても無駄だと思うのであるが、注目すべきは、(Z)である。今迄は、父は子に教えようなる口をきいてきた。その態度をやめたのである。夕霧を大人と見なして、父らしい忠告無用というのである。

養母役の花散里は、気がかりで、「一條の宮わたし奉り給へるとかの殿わたりなどに聞ゆる、いかなる御事にかは」と訊ねる。夕霧は彼女には委しく実情を話してきかせ、父源氏によろしくと、とりなしを頼むが、「あり〳〵て心づきなき心つかふとおぼし宣はむと憚り侍りつれど、げにかやうの筋にてこそ人の諫めをもみづからの心にも随はぬやうに侍りぬべけれ」と、しみ〴〵うちあける。同時に、父六條院は多くの妻妾をここに擁している。しかし、おだやかに住みなしている紫上、花散里の御心用いのめでたさを口にする。つまり、父が示している貴公子の生きざま、父の家庭を羨む、とは、女二宮との結婚に反対は出来ない父だ、と言外に匂わすのである。花散里は、笑いながら肯定する。(E)「さてをかしき事は、院のみづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだ〳〵しき御心づかひをば大事とおぼいていましめ申し給ひ、後言にも聞え給ふめるこそ、さかしだつ人はおのが上知らぬやうに覚え侍れ」(花散里)権妻を相手に、子息のかげ口をたたくようになっては、父の威力はない。それを、その権妻に(E)笑われているのである。「さなむ常にこの道(夕霧)の節をしも誡め仰せらるる。さては、かしこき御教へならでも、いとよくをさめて侍る心を」とて、「げにをかしと思ひ給へり」(F)。父が異性関係で、常に説教するが、いわれなくとも私は、よく理性で制御しているのに。と反論し、なるほど花散里の仰のとおり、(F)と、「ふ、ふ」と思う。源氏が内心軽く思っている花散里にさへ、源氏は(E)、容赦なく批判され、笑われる。子の夕霧は、もう、源氏の後姿をみ

てほほえむ。源氏の権威失墜である。六條院に、主人公交替の時機が近い事を思わせる。夕霧は、まさに立派に成長した。恋をしても、誰にも、何とも言わせずに、堂々と我が道をゆく。父は六條院に二人北方と二側室と計四人の女性を据えている。私が二人北方を設けて何の悪いことがあろう。遂に女二宮をも北方として公認させてしまう魂胆である。夕霧には、有無をいわせぬ事実がある。それは、現在、父の北方におさまっている女三宮は、そのかみ、先ず第一には自分に朱省院の打診があったのだ。それを、さりげなくかわしたところ、父への降嫁となった経緯である。その姉皇女二宮を、わが北方として加えるに何の異存を言わせようぞ、父に。この思いを腹にもつ夕霧に対し、源氏は一言もない。源氏がカマをかけても、さらりとかわして、女二宮の事を語ろうとしない。凄みがある。源氏は引き下がり、後言となる。源氏腹芸の負け、である。それは又、人間として、実なる男性として、源氏の負である。

○大納言右大将夕霧の家族

夕霧巻末に、大納言夕霧の家族を披露する。

。北方、側室の区別は厳然とつける。

北方（三條邸）雲居雁腹

太郎　三郎　四郎　六郎

大君　中の君　四の君　五の君

内侍腹（側室）

次郎　五郎

三の君　六の君

「すべて十二人が中に片ほなるなく、いとをかしげにとりぐ〜に生ひ出で給ひける。内侍腹の君達しもなむ容貌をかしう心ばせ才ありて皆優れたりける」

十二人の子女が何れも立派である事、就中、側室内侍の子女が優秀であるという。前述のように、北方雲居雁をすぐれた人物として造型しない。ここに作者式部の魂胆をみるべきである。致仕太政大臣の女でも、これくらいのもの、それが大納言夫人になっても、何らの成長もしていない。下々の女性と何の違いもないもの――（それより、地方官から参議になり上った惟光の女の方が、ずっと人間が優れていて、頭もよく、上の段階の女性だ）――である。内侍腹の二子――「三の君、次郎君は東の御殿にぞ取分きてかしづき奉り給ふ。院も見馴れ給ひていとらうたくし給ふ」――は、夕霧をあづかった花散里の領かりで、六條院に住み、六條院も目をかけるという。北方、側室、多勢の子女、これに、何れ、皇女二宮が北方として加わる予想。夕霧は父にまさる子福者である。既に堂々たる壮年の貫禄である。邸は本邸の三條邸（左大臣、大宮旧邸）とこれに六条院、（二條院）を相続するのである。父の旧邸と母葵上里方の旧邸とを領有して、天下に権勢を張ろうとする。父は二条院と六条院であった。夕霧はその上にあの三条邸をも相続したのだ。

女二宮、落葉宮が北方とし登場するのは匂宮の巻である。雲居雁が三條殿に戻った事も、落葉宮が夕霧と結ばれた事にもふれない。作者はほうっておく。当然の成行として。

真面目ぶってさかしがる大将の、一色かわった恋物語、というより、柏木未亡人女二宮――（柏木は「落葉を何に拾ひけむ」、とあ

なづった皇女であった、つまり、それほど、飛びつく程の女性でもないが……夕霧にも皇女好みの意識が潜在していたらしい。柏木とは従兄弟であるから、柏木の皇女ならでは得じ、の意識と共通する性格が、葵上系で流れている）――入手物語を、おもしろをかしく形成した。まじめ人間の恋は、野暮で、不様でいささか滑稽ですらあるが、作者には、このましいのである。このようにして、無理に手に入れた落葉宮と雲居雁を十五夜づつ正確に泊るという、この律義さ、少年の日、父の六条院に挨拶し、三條宮の祖母に挨拶して宮中に出仕した夕霧は、恋においても、律義に二等分したのである。二人北方をもつ御仁は、以て範とし給うべし、と作者は、ほほえみながらいう。作者のいたづら、である。

壮年期　[御法]　30才　権力者夕霧

紫上の死。悲歎にくれる源氏を助けて、紫上の最後の望み、受戒を実現させ、葬送、法要と、夕霧が一切をとりしきる。「御わざの事どもはかゞ〳〵しく宣ひおきつる事なかりければ大将の君なむ取もちて仕うまつり給ひける」

[幻]　31才

紫上の死後、源氏は呆然とすごす。一周忌を前に、夕霧は一手に凡てを差配し、やりとげる。紫上に遺児のなかった事を惜しむ夕霧に、「其許にこそは門はひろげ給はめ」と父はいう。源氏は、かくもあるべかりし人生行路を夕霧に期待し、祝福し、光源氏は姿を消そうとする。二代目の時代も終る。源氏前篇終了。

八年が経過した。源氏は（恐らく五十三才）で嵯峨院で出家し（宿木所出）、その後逝去。致仕太政大臣も逝去。初代は共に姿を消した。源氏世界はガラリとかわる。夕霧の天下である。

[匂宮]　40才　右大臣夕霧。三代目の時代、夕霧は後見の役（太政大臣は髪黒）

右の大臣「人の上にて古の例を見聞くにも、生ける限りの世に心留めて造りしめたる人の家の、名残なく打捨てられて、世の習ひも常なく見ゆるは、いと哀れにはかなさ知らるゝを、我が世にあらむ限りだに、この院荒さず、辺の大路など人影かれ果つまじう」思し宣はせて、丑寅の町に、かの一条の宮を渡し奉らせ給ひてなむ、三條殿と夜毎に十五日づつうるはしう通ひすみ給ひける

右大臣夕霧の繁栄と三代目薫、匂の紹介。

六条院の見事な継承にとどまらぬ。大君は春宮女御、中の君は二宮妃、と子女も多く、繁栄の一門となった。養母花散里は、東の院を遺産相続して移り、あとへ、北方として女二宮を住まわせる。あかぬ事は、「紫上が生きていらしたら」と残念に悲しく思う事のみ。

[竹河]　40才〜49才　左大臣夕霧の権勢、髪黒太政大臣逝去後の玉鬘邸物語

故太政大臣未亡人玉鬘のよき相談相手となった実意ある夕霧。玉鬘の実弟達よりも夕霧を頼りにする玉鬘は、大君の結婚問題を相談する。子息の蔵人少将が、「死ぬばかり思ひて」母雲居雁を通じ

て、伯母の玉鬘に猛運動をしている事を、百も承知の上で、夕霧は冷静に判定して、冷泉院に入内をすすめ、但し、弘徽殿女御は「ゆるしきこえ給ふや。さき〳〵の人さやうの憚りにより、とどこほる事も侍りし」と細心の配慮をしてやる。流石に入内の折は、

「みづからも参るべきに思ひ給へつるに、つつしむ事の侍りてなん。男ども雑役にとてまゐらす。うとからず召し使はせ給へ」

自身は遠慮したが、「御車、御前の人々あまた」と共に令息達「源少将、兵衛佐」などを雑役に出してやるという誠意ある人物である。玉鬘は「情はおはすかし」とよろこぶ。実弟の紅梅大納言よりも世話をやく。玉鬘を義姉として後見役を果す六条院の当主。見識と実意を兼ね備えた左大臣、大政治実として申し分がない。

宿木　50〜52才　権力者夕霧

①弟薫に女二宮降嫁の折、この権力者は、あのように無理をしてえた北方落葉宮でありながら、

左の大臣も「珍らしかりける人の御おぼえ宿世なり。㋺故院だに、朱雀院の御末にならせ給ひて、㋩今はとやつし給ひし際にこそ、かの母宮を得奉り給ひしか。㋥我はまいて、㋭人も許されぬものを拾ひたりしや」と宣ひ出づれば、宮はげにと思すに、恥かしうて御答へもえし給はず……」

これよりすると、どうも夕霧の落葉宮に対するる恋は、子沢山の自邸のさわがしさに対し、落葉宮邸のしめやかな気高い雰囲気に魅力を感じたのは、もとよりであるが、恋の正体は、落葉宮が皇女である事が重要な因子であった、皇女ごのみにあったのではないか。落葉宮は、夕霧が何も、今更のぼせる程の人物でも美人でもない。柏木が「落葉を何に拾ひけむ」と歎かれ、「御かたちまほにもおはせずとことの折に思へりしけしき」を、落葉宮は、情けなく思い出す……というのである。そのかみ、朱雀帝から女三宮降嫁の打診があった際は、夕霧は朱雀院の言のとおり、漸くの事で、念願かなって結婚したばかりの雲居雁に、物思をさせたくないという純情な時代であった。その北方との間に七人、典侍に五人計十二人の子をなした権力者夕霧は、昔の純情な夕霧ではない。父六条院の承継者として父のような生活を夢みている。父は四人の妻妾を据えて穏やかにみやびを交させている。ここで、余裕をもって北方をもう一人設けようと思う。五人の子をなし、しかも優れた子の母、惟光女を格上げしようとはせぬ。あく迄もかげの人、明石の御方所遇にしておく。北方として、従兄の柏木、紅梅のように「皇女ならではえじ」の魂胆があった。とみるべきであろう。左大臣系家門に流れる皇女尊重、名門意識の血が夕霧にも母葵上を通じて流れていたとみるべきである。源氏は、行きがかり上、女三宮と結婚したので、彼から願った事ではなかった。

さて、皇女ごのみ、でえた落葉宮と解すると、㋑㋺㋩　の言が納得がいくのである。この、拾ひたりしや、の暴言に注目しよう。落葉宮は㋥の態度をとる。まことに、味気ない間柄とはなったものである。夕霧巻での夕霧の執心の延長線上に、この時期がくる、実務家肌の秀才官僚、現実的で几帳面な人間が、千年後の今日も、どこにでもいる人間像が、リアルに形成されている。父源氏とは、恋愛

においては、全くちがう人物である。

父源氏は、このようにあらわに女君を恥かしめるような言葉は吐かない。しかし、行動においては、紫上は気の休まる折とてなかった。夕霧は、雲居雁、落葉宮に対し、共に、言いたい放題の事をずけ〳〵という。しかし、十五夜づつわけて通う。他にわける夜はない。あの典侍も中途だえの時期で、雲居雁と結婚後はあまり省みられなかった、という。二人の北方は、至極、のんきで、全く安堵していてよかった。一人は三條本邸に、一人は六條院夏の殿に、正妻の座を誇る生活である。一時は、六條院の春の御方と讃えられた紫上は、寝殿から東の対へ移され対の御方となった。寝殿には女三宮が正妻として降嫁し、以来屈辱の日々、さりげなく、それに耐えぬこうと努める紫上の心情にも限界があった。絶望から遂に発病、到頭、六條院を出て、己が御殿二條院へ移る。つまり、六条院を出たのである。四十三才の若さで他界。幸せな生涯と言えるであろうか。しかし、源氏は、紫上に「貴女は幸せな妻」という。先帝の皇孫、式部卿宮の側室腹の姫で、源氏に引きとられ、葵上亡き後、北方と遇されたが、女三宮降嫁後は、権北方に格下げである。その外面的所遇よりも、紫上にとって堪えられなかったのは、源氏の色好の性が女三宮の若い女体に惹かれてゆく、それを紫上は熟知していたのであり、恐れていた。それが現実となって萌しをみせた時、紫上は絶望した。

わが身はたゞ一所の御もてなしに人には劣らねど、あまり年積りなば、その御心ばへもつひに衰へなん。さらむ世を見果てぬ先に心とそむきにしがな……

(a)

(b)

(c)

渡り給ふ事やう〳〵等しきやうになりゆく。さるべき事、ことわりとは思ひながら、さればよとのみ安からず思さるれど、なほつれなく同じ様にて過し給ふ。

いち早く、源氏の夜の訪れが、次には、己の方が少くなる、と察知して、そうなる前に出家、即ち、妻の身分放棄を決意し、源氏に願い出る。源氏はもとより許さぬ。しかし、正北方の座を逐われ、しかも夜の訪れが早晩、少くなってゆくと知って、妻の座をも降り、優婆夷の生活に入ろうという。妻として、この上の悲しみ、不幸はあるまい。源氏には此時まで、まだ、紫上の苦悩の深さがわかっていなかった。彼はもののあはれをしる色好を自認するが、所詮、自己中心の色好にすぎなかった。紫上の側からみれば、源氏は、まめなる夫という点において、夕霧にはなはだ劣る。

読者は考えるであろう。私は光源氏を選ぶか、夕霧を採るか、と。多くの女性は、夕霧を夫として願うのではあるまいか。世の父親族にいたっては、婿に源氏は桑原桑原というところであろう。②六の君に匂宮を婿どりする。懐妊中の北方中の君のおもわくなど、一切無視、わが道をゆく人物である。中の君は両親なき不遇の従妹であるが。

薫を六の君の婿にと考えていた夕霧は、今上に先をこされて、不平をいう。

(A)

(B)

「女子後めたげなる世の末にて、御門だに婿求め給ふなる世に、ましてたゞ人のさかり過ぎむもあいなし」とそしらはしげにのたまひて中宮にもまめやかに恨み申し給ふ事度重なりければ……。

妹の明石中宮に恨んで、匂宮を強引に婿どりする。女二宮降嫁について、帝に対する「そしらはしげに」不平をいうのは、夕霧と紅梅大納言二人である。柏木亡き左大臣家の代表である紅梅は後に右大臣となり夕霧左大臣と共に天下の政権を執る人物。この従兄弟同志が、帝の婿えらびを微笑ましくみてやれずにブツクサいう。源氏は常に帝を庇う大臣であった。夕霧も(A)(B)の言を吐くようになっては、父の血統ではなく、母葵上系、紅梅と共に左大臣家の血統をひく二人は、所詮帝を庇う器量はなく、一流の大政治家とはなりえない。

匂宮が六条院の南の町に住み、東の町の六の君に通うようになり、二條の院（中の君）に戻ることも途だえがちになるが、たま〳〵

御琴ども教へたてまつりなどしつゝ三四日こもりおはして御物忌などことづけ給ふを、かの殿にはうらめしく思して、おとど、内裏より出で給ひけるまゝにこゝにまゐり給へば……。

……やがてひきつれ聞え給ひて出で給ひぬ

二条院に戻った匂宮を、夕霧右大臣は自身出むいて、無情にも六条院へつれてゆくのである。

さばかりやんごとなげなる御様にてわざと御迎へにまゐり給へるこそ憎けれ……

と女房共は歎く。身寄りのない近親者の弱者に対し、このような、傍若無人の振舞は、光源氏は絶対しないところである。「もののあはれ」をしる人であるから。夕霧は自己中心の我利我利盲者になってしまった。伯父致仕太政大臣に通じる。葵上にも、他への思いやりがなかった。伯父致仕太政大臣は、夕霧には抗議せず、孤立無援の落葉宮に恨みをいいにやった。弱者をあわれむ心など微塵もない。他人の思わくなど考えようともしない、心なの者、したたかなる頑固である。清しく雄々しかった少年の日の意地っ張りは、年をへて、このように、変にかたまってしまった。父源氏の、溢れるような情愛にひたることのなかった夕霧は、謹厳な左大臣邸で祖父母の愛に育まれたから、左大臣家の謹厳実直、清純な少年に育っていた。しかも、伯父致仕大臣の心ないしうちにあい、歯をくいしばって暮した臥薪嘗胆の六年間は、皮肉なことに、夕霧の中に流れる母葵上、伯父致仕太政大臣の血統、頑な性格を強力に伸ばして、伯父に似せてしまった。彼の血統の中にあるもののあはれしる父源氏の性格は、あの環境では十分に伸びえなかったのである。

蜻蛉　53～54才

左大臣殿昔の御けはひにも劣らずすべて限りもなく営み仕うまつり給ふ。いかめしくなりにたる御族なればなか〳〵古よりも今めかしき事は勝りてさへなむありける。

六條院の華麗さ、当世風の派手さは、昔以上だという。伯父致仕太政大臣を思わせる夕霧の生活態度である。

権力者光源氏、ことに夕霧の造型には、藤氏の権力者、就中、御堂関白道長専横のイメージが作者の悩裏にあったと思われる。小一條院廃太子事件、同院に寛子をめあわせる、定子には従妹の彰子を一條帝に納れ、第一親王敦康をさしおいて彰子所生の敦成立太子の無情冷酷、傍若無人の振舞には共通のものがある。匂宮の北方中の君は、夕霧には従妹に当る。匂宮にも六の君をめあわせて、六條院にとりこめる。すでに、春宮、二宮には、大君、中君を納れてい

る。父源氏は五十二才で源氏世界から消えたが、夕霧は、源氏物語世界の終幕時は五十四才、左大臣で権勢のただ中にある。夕霧は恐らく、太政大臣となり、六十も七十も八十迄も長く生きるであろう。その甥、ついで孫も皇位につき、外戚として天下の実権を掌握しつづけるであろう。その子息も亦、大臣となって、源氏の家門は栄えてゆく事であろう。それが、父源氏が夕霧の為に望み、画策した人生コースであったのである。

夕霧は、一見、父源氏とは全く異なる性格をもつ。若き日は、真面目、潔癖、純情、自己抑止力の強さ、素直さ、素晴しい少・青年であった。それが壮年期には、堂々たる識見をもつ、諸事に礼節をたっとぶ誠実な大臣となったが、反面、傲岸不遜、弱者いじめ、思いやりのなさをもってきた。それは、そのかみの左大臣家がもつ生真面目さ、教養ある態度、礼節ある振舞の素質をうける、うるはしき態度である。同時に、葵上、頭中将がもつ、ハタの者への思いやりのなさ、頑固さの性格をも受けついでいる。夕霧の意地の強さは、半面父源氏ゆづりでもある。源氏もふて〳〵しい傲岸さを内に蔵していた。逆境時代に、己を白眼視した人々に、源氏の冷遇は厳しかった。式部卿宮家に対してさへ容赦しない。又、そのかみの盟友頭中将にさへ、後年、かなり手きびしい対立意識で行動する。無名草子がいみじくも指摘するとおりである。

さばかり煩はしかりし世の騒ぎにもさはらず、須磨の御旅住みの程たづねまゐり給へりし心深さは、世々をふとも忘るべくやはある。それ思ひ知らず、よしなきとりむすめして、かの大臣の女御といどみきしろはせ給ふ、いと心憂き御心なり。絵合のをり、須磨の絵二巻とり出ててかの女御負けになし給へるなど返す返す口惜しき御心なり。

聡明な源氏は、頭中将を政敵とはしない。中宮冊立、立太子というような政権にかかわる重大な人事には、有無をいわせず己の意のままに、自己の側の者を立てるが、一般行政は、太政大臣となっても、一切、内大臣に委ねて、鷹揚に振舞うのである。つまり、夕霧の中には父系母系両方の意地の強さ、「涙もろにはおはさぬ御心」、の血が流れている。彼が秀才であればあるだけ、十二才から十八才迄の苦心の六年間で一層、その性は父、伯父よりも鞏固な頑固さ、傲岸さとなっていったのである。

夕霧のまめなる心、誠実さは、実は、父源氏が十分にもっているものであった。夕霧は祖母大宮の死に際して、伯父内大臣が、葬儀、法要を盛大にするだけの表面的親孝行に対し、源氏がしんから悼み歎く姿にうたれる。父は祖母の生前、いかに心を使ったか、夕霧の元服の式場を、三條邸にしたのは「大宮のいとゆかしげに思したるもことわりに心苦しければ……」であった。野分の日、父は夕霧を逸早く、見舞わせたのである、内大臣は見舞わなかった。

源氏は、反いた女人は逐わぬが、かかわりをもった女人は末永く面倒をみる。いかに醜く迂遠、教養に欠くところがあろうとも、あからさまに恥かしめる事はない。それ相応の気位をもたせて遇した。六條院、東院には、それらの女人が集り住んでいた。

夕霧は父のみやびに憧れ、見習うようになる。六條院の紫上の御有様に憧れ、花散里の人柄になつき不器量な花散里を大事にする源氏のもののあはれしる寛く豊かな心を理解するようになる。女三宮

が降嫁しても、紫上は対に退き、しごく穏やかに暮しているようにみえる。花散里も明石も、程を心得て、六條院には明暮、春風が快く吹きめぐる雰囲気である、と思っている。夕霧は驚きと憧れでながめるうちに、「ほのすきたる下心」をもつと源氏に評される夕霧は、何せ、源氏の子である。十二才で雲居雁と筒井筒の恋を語らうた貴公子、だん〳〵と、美しい貴婦人達を集えてくらす六條院の色好の生活がこのましくなってくる。雲居雁、藤典侍だけしかしらなかった初心な夕霧は、紫上、玉髪、秋好中宮といった一流の貴婦人達をみて、あっと仰天するばかりである。夕霧の目がひらく。啓発されると速度で、いっぱしの見識をもつにいたった。秀才の彼は、すでに女三宮を批判し、六條院の後継者として、軽卒な宮に注意を喚起する迄に成長する。玉髪に対する父の度すぎた好色の振舞に、顔をしかめ、面とむかって直言する。「うるはし」き御心をもった貴公子である。それが、壮年に近づき、地位をうると、突拍子もない強引さで皇女二の宮を手に入れる。夕霧という人間の、複雑かつ多彩な成長過程である。父源氏とも、伯父致仕太政大臣ともこ、となる権力者となった。これは、もう一人の源氏の姿であった。源氏が、今の己でなく、かくもありたかったと望んだところの、もう一人の自己の姿であった。夕霧は源氏のヴァリエーションにすぎぬ、ともいえよう。源氏といたく異るが、前述のように、源氏の中なる傾向が、違った伸展をしたものであった。

ただ、夕霧左大臣において、あまりにも現実的であり、八味もそっけもない夫ぶりに、読者は失望するであろう。いかに源氏が望んだ生きかたを夕霧がしているとみなしても。

式部はそこで、薫を創造したのである。源氏のもつ真実なる心、夕霧のもつ純情、誠実な心を、一層純粋にもつ薫、しかも、源氏のもつ溢れる程の愛情、まわりの人々をいとをしむ心を、そのままもっており、源氏の晩年を呪われたものにしたところの病的な迄の色好の性をもたぬ人物である。しかも、女性読者のすきな、罪の子の烙印を押されて此の世に出生した貴公子、愛する人と結ばれる事なく、その人形として現れた異母妹すら甥――（実は従兄）に奪われるという悲運の人、実父は姦通の故に法律上の父ににらみ殺され、母は二十三才の若さで、その罪ゆえに出家、しかも、その姦通も、もとはといえば、父源氏の第一の姦通――（義母であり后妃でもある藤壺を犯し、姦淫の子を、何食わぬ顔で皇位につけた）――の報果として出現した第二の姦通に外ならなかった、という、許容条件が完備している。夕霧にとって、この薫は実は異母弟ではなく、母系からは、従兄の子であり、父系からは従妹の子である。つまり、実弟ではないが、父母両系統からの、同じ血が身内に流れている、源氏にとって薫は実子ではないが姪の子、かつ従兄の孫、同じ血が流れている間柄というわけである。

作者は、一見、光源氏に反するかにみえる夕霧を創造し、その両者を合し、更に深め発展させた存在として薫を創造した。それについては後述にゆづるが、この一連の光源氏、夕霧、薫も、つまるところ、光源氏、というわけなのである。薫迄――少くとも――薫の悩みの深まってゆくところ、惑いまでを物語らなくては、「光源氏の物語」、即「人間のものがたり」は語りおおせない、と作者は言うのである。

（一九八五年八月）